

大阪市における母子保健システム —— 自閉的遅滞児の早期発見・早期療育 ——

武貞昌志 大阪市立小児保健センター
福田優子 大阪市立小児保健センター

研究目的： 自閉症は生後早期に発症し、言語認知機能や対人関係に重篤な障害をおこす。そのため早期発見・早期療育・治療の一貫したアプローチが重要である。大阪市の行政施策として行われている母子保健システムの流れの中でその成果をあげることがを目的に、自閉的遅滞児の早期発見のシステム開発を図り、言語発達に遅れのみられる児の事後管理の質的向上を図ることを目的とした。

対象・及び方法：

昭和57年度の大阪市の9保健所の1:6;3:0健診で精神発達面で追跡管理、精検、要治療、治療中と診断された児を対象とし、対照として同時期の健診で正常と診断された児を抽出した。調査は別に検討を行っている小児異常行動評価研究会作成の乳幼児異常行動歴24項目の有無(表1)、と自閉的行動65項目の4段階評価(小児異常行動質問紙 Suppl I 式で大項目3, 中項目11よりなる表2)を保健婦による訪問調査(一部アンケート方式)で資料を得て解析した。又基礎調査として大阪市立小児保健センターを受診した自閉的遅滞児129名を対象に同様の調査を行った。(表3)解析に当たっては昨年の報告に従って質問項目のチェックを数量化し、表6にみられる得点別に軽度・中度・重度として行動歴評価と現在症評の関係を検討した。

結果：

保健所を受診した児について乳幼児異常行動歴と現在の自閉的症狀のチェックの分布を図1にしめた。

今回の調査では乳幼児期異常行動歴は retrospective にみたものであるが、それと現在症との間には、乳幼児期早期にみられる異常行動の度が高いほど、長じてのちに自閉的傾向が強くなりみられることが示唆された。表4に示すように、乳幼児期にみられた自閉的傾向と、現在の自閉的症狀とは遅滞児においても、対照群において

も明らかな正の相関がみとめられた。

表5に示した小児センター受診の自閉的遅滞児129名の成績から、乳児期に自閉的行動異常が24項目中で8項目以上チェックされた場合88.9% 中度以上の自閉的症狀を長じて後にしめしてくることがわかった。

保健所で管理中の今回の対象児の場合、乳児期にみられる自閉的異常行動歴でのチェックの程度と現在の自閉的問題行動のチェックの得点分布からみた、三段階の重症度との関係をみると表6のとおりである。

以上の結果から、乳幼児期異常行動歴を1才6ヶ月健診の際にチェックすることによって、将来自閉的症狀をしめす可能性のある児を注意深く追跡観察し指導を行ったり、治療のルートにのせたりすることが可能であり、また乳幼児期異常行動歴をチェックすることが自閉的遅滞児を早期発見する指標となり得ると考えられた。

次に今回の調査にあたって自閉的遅滞児が診断をうけても早期治療について適切な対応がなされていないことが明らかとなったので次の検討項目を設定して検討を開始した。すなわち自閉的症狀をもつ児に対して、日常的な運動療法によって基礎体力をつけていくことが療育上有用であることが経験的に知られているにもかかわらずその受け入れのあり方には指針がなく、また運動療法の有効性の科学的な評価も行われていない。そこで民間トレーニング施設における自閉的症狀をもつ子供の受け入れ促進を目的に、「民間トレーニング施設における自閉的症狀をもつ子供の受け入れ実態のアンケート調査」(昨年報告)の結果をもとに軽度心身障害児の運動療法の普及に関する調査研究委員会(財団法人健康管理・開発センター)と協力して、民間トレーニング施設における運動療法指導マニュアル-自閉的症狀をもつ子ども編第一次試案を作成した。またその際小児異常行動評価研究会の行動評価尺度を用いて児の治療経過を評価する方法を検討している。

表 2.

大項目		中項目	小児行動 質問表
自 語	閉 鎖 性	1. 言語表出	1 ~ 5
		2. 反響語	6 ~ 8
		3. 言語理解	9 ~ 15
		言語	
対 人 関 係 性	閉 鎖 性	1. 対人接触(共感)	16 ~ 22
		2. あそび	23 ~ 29
		3. 場面適応	30 ~ 41
		対人関係・社会性	
行 動	認 知 行 動	1. 知覚	42 ~ 54
		2. 協同運動	55 ~ 59
		3. 模倣行動	60
		4. 同一性保持	61 ~ 62
		5. 常同行動	63 ~ 65
		認知・行動	
		自閉的行動	

表 4.

乳児期にみられた自閉的既往 VS 現在の自閉的症狀 (1~65)				
	n	r	p	
精神発達面で遅れのみられた群	(A) 195	0.590	<0.01	
コントロール群	(B) 63	0.547	<0.01	
乳児期にみられた自閉的既往 VS 現在の自閉的症狀 (1~15)				
精神発達面で遅れのみられた群	(A) 195	0.582	<0.01	
コントロール群	(B) 63	0.624	<0.01	

表 6. 保健所の健診で発達の遅れがみられた児を対象として乳児期にみられた自閉的既往の程度と現在の自閉的症狀の程度

乳児期	現在			計
	0~18 軽度	19~41 中度	42~ 重度	
軽度 7以下	135	11	1	147
中度 8~14	25	18	2	45
重度 15以上	1	0	2	3
計	161	29	5	195

表 3. アンケート調査対象

対 象	No.	Total
A. 保健所健診で 精神発達面で遅れのみられた群		
1才半健診	77	195
3才児健診	118	
B. コントロール群		
1才半健診	46	63
3才児健診	17	
C. 小児保健センターを 受診した自閉的遅滞児	129	129

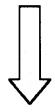
表 5. 小児センターを受診した自閉的遅滞児を対象として乳児期にみられた自閉的既往の程度別現在の自閉的症狀の程度

乳児期	現在			計
	軽度	中度	重度	
軽度	12 (57.1)	7 (33.3)	2 (9.5)	21 (100)
中度	9 (16.1)	29 (51.8)	18 (32.1)	56 (100)
重度	3 (5.8)	18 (34.6)	31 (59.6)	52 (100)
計	24 (18.6)	54 (41.9)	51 (39.5)	129 (100)

表 1. 乳幼児期異常行動歴

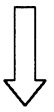
項 目*	あ つ た	不 明
1. ややしても顔をみたり笑ったりしない。(Lack of social smiling)		
2. 小さな音にも過敏である。(Hypersensitivity)		
3. 大きな音に驚かない。(Hypo-sensitivity)		
4. 喃語が少ない。(Poverty of babbling)		
5. 人見知りしない。(Lack of stranger anxiety)		
6. 驚き(主に母親)があつても平気で一人である。(Aloneness or indifference)		
7. 眼のあとを追いしない。(Lack of following)		
8. 名前を呼んでも顔をあげては振り向かない。(No response to calling)		
9. 表情の動きが少ない。(Expressionless face)		
10. イチゴアイビーをしても喜んで笑つたことがない。(No response to peek-a-boo)		
11. 顔こうとしても指がれる姿勢をとらない。(Lack of anticipatory motor adjustment)		
12. 視線が合わない。(Lack of eye-to-eye contact)		
13. 指をしない。(Never uses finger pointing)		
14. 言葉を出すよりも音韻がほとんど出ないか、2-3語出た後、急に発達しない。(Speech delay)		
15. 1歳まで言葉に出現しては言葉の発音が不明。(Loss of verbal expression)		
16. 人やテレビの動作のまねをしない。(Difficulty in copying movements)		
17. 音や光刺激を繰り返して、顔を動かしてそれを楽しまない。(Autostimulation behavior)		
18. 音韻がほとんど関心を示さないで、誰かが話しているのを聞かない。(Extreme withdrawal)		
19. 遊びが介入されるとやがる。(Dislikes being intervened)		
20. じっと遊びをしない。(No symbolic play)		
21. 名前を呼ぶ、視線、遊びなどなく戻りたがる。(Insistence on sameness)		
22. 知らず知らず手をはなすことに行かなくなる。(Hypersensitivity)		
23. 突然大きく泣いたり笑ったり、泣きだす。(Sudden laughing and crying without any apparent reason)		
24. 興奮が個別になつたり、興奮状態が持続する。(Frequent and disturbed emotional mood)		

*1-24は()内の英文の内容の一切の訳である。各項目は各発達段階において、存在することが期待されるものをとりあげてあり、1-12は1歳以下、13-24は1歳以上として、発達段階に別列してある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的:自閉症は生後早期に発症し,言語認知機能や対人関係に重篤な障害をおこす。そのため早期発見・早期療育・治療の一貫したアプローチが重要である。大阪市の行政施策として行われている母子保健システムの流れの中でその成果をあげることを目的に,自閉的遅滞児の早期発見のシステム開発を図り,言語発達に遅れのみられる児の事後管理の質的向上を図ることを目的とした。